

## 第 10 回太田勝洪記念中国学術研究賞の発表・授与について

第 10 回太田勝洪記念中国学術研究賞は、日本現代中国学会の『現代中国』編集委員会および『中国研究月報』編集委員会およびより推薦のあった下記論文が選ばれました。2014 年 1 月 25 日（土）に開催された中国研究所新年会において、川島真・日本現代中国学会事務局長（大西広・『現代中国』編集長の代理）、代田智明・『中国研究月報』編集委員から受賞の理由が述べられ、杉山文彦・中国研究所理事長より受賞論文の発表および賞状・賞金の授与が行われました。

受賞作品：

◎濱田麻矢氏

「遙かなユートピア——王安憶『弟兄們』におけるレズビアン連続体——」

（『現代中国』第 87 号）

### 【推薦理由】

濱田麻矢「遙かなユートピア——王安憶『弟兄們』におけるレズビアン連続体——」は、現代中国を代表する女性作家である王安憶の「弟兄們」を題材とし、そこに登場する三人の女性に焦点を当て、ジェンダー論の視点から作品分析を試みたものである。濱田氏はアドリエヌヌ・リッチの提起した「レズビアン連続体」（強制的異性愛に対抗する手段としての女性同士の紐帯）という概念を援用して「弟兄們」の三人の女性の関係性を説明し、三人が学校を卒業したのち、一人が出産を経験することをきっかけに徐々にその関係に亀裂が生じていくありさまを、作品に即して具体的に論じている。最後に濱田氏は、この小説は「女性同士の絆（レズビアン連続体）が持っている力を言語化し、明視化させた作品として、当代女性文学史の中で大きな意味を持つもの」であると結論付けている。

論旨は明解であり、作品に対する具体的で正確な分析は説得力を持つ。王安憶の作品は女性が主人公である作品が大多数を占め、中国の研究者の中にもジェンダー論的な視点から王安憶を研究する者が少なくない。そういった意味では素材と分析方法に目新しさが感じられるわけではないが、濱田論文の特長は、「弟兄們」の「女性同士の絆」がなぜ必要とされたのか、またどのような危険性を孕んでいたのかを作品の細部に沿って丁寧に論じ、結果としてこの作品の深層にある論理を見事に引き出していることにある。

濱田氏は、これまで張愛玲、陳衡哲、凌叔華など民国期の女性作家とジェンダーを中心に研究を続けてこられた。本論文はその延長線上にあるが、時代的にはこれまでよりもずっと新しい時代に視野を広げており、研究の広がりを感じられるとともに、今後の展開にも興味をもたれる。

上記のような理由から、編集委員会は濱田氏の論文に太田記念賞候補としての資格が十分にあると判断し、ここに推薦する次第である。

『現代中国』第 87 号編集委員会

受賞作品：

◎津守 陽氏

「「におい」の追跡者から「音楽」の信者へ——沈從文『七色魘』集の彷徨と葛藤」

【推薦理由】

津守論文は、近代の作家沈從文の「文学」「表現」に対する激しい追求の過程を、丹念に分析検討したものである。近年、近代中国文学研究の分野では、世界的にも沈從文のテキストに対する論究が盛んになっており、日本でも魯迅研究に勝る活況を呈している。著者の論文は、そのなかでもとくに難解な 40 年代後半のテキストを対象とし、それを精緻で鋭敏な感覚で分析した意欲作であり、沈從文研究において、最先端をいくものと評価しうる。沈從文における「世界」や「生命」の美に対する描写の重点は、30 年代には郷土色が強く、泥臭い「におい」にあり、そのことによって沈の小説は、近代的な都市リアリズムとは異質な特色を獲得していた。しかし 40 年代に入ると、「凝視」を中心とする視覚表現に重点が変わり、それまでの静かな描写から絢爛たる修飾に移行する。そこで、聴覚的描写と視覚的描写とに重点がおかれた対照的なテキストが、共存することとなった。論文は、その両者の葛藤から逃避するように、「音楽」に対する信仰のような表現が出現してくるとする。これらの指摘は、後期沈從文研究に対する、大きな貢献と言えよう。

さらに分析の射程は、結論部分で触れられるように、中国 1940 年代文学に秘められた新たな潮流を発掘する可能性ももっている。つまり文学における現実性、リアリティそのものが具体的なものから「抽象性」に変化し、表現自体が大きく転換する時代であったことを物語ることである。そのなかに、沈從文の深い文学的苦悩があったことを、本論文は証していよう。さらに言えば、そんな文学的苦悩による危機と自殺という行為そのものが、中国文学史における大きな事件であることも、論文から示唆されることであろう。これらは、中国における「書写=ディスコース」の重たさとモダニティに関わる重要な論点を提示してもいるのだ。著者が今後さらに視野を拓げて、中国と文学とモダニティに関しても研鑽を積まれることは、本論文から十分に窺えるものであり、その意味も含めて、本論文が太田記念賞にふさわしい奥深さを有していると確信し、ここに推薦するものである。

『中国研究月報』編集委員会